

東大阪市埋蔵文化財包藏地調査概要23

半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

1982. 3

東大阪市教育委員会

半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概要

1982. 3

東大阪市教育委員会

は し が き

東大阪市域の遺跡内では、例年数多くの土木建築工事等の開発行為が進められています。これらの工事の大半については、直接埋蔵文化財に影響を与えないよう指導しておりますが、どうしても影響の出る工事については届出者の方々と協議し、ご協力をいただきて事前の発掘調査を実施し、昭和56年度においては、立会調査を含めて約70件の発掘調査を実施いたしました。

この中で、市埋蔵文化財調査概報23として刊行の運びとなりました2件の発掘調査は、ともに個人住宅建設に伴うもので、国庫ならびに府費の補助を受けて行う緊急発掘調査事業の対象として実施したものです。

とくに、市域東南部、六万寺町1丁目に所在する半堂遺跡の調査では、周辺には類例の少い、かつ特徴的な人物埴輪をはじめとする埴輪群が、古く削平された古墳の周濠跡周辺より発見され、これまで推定の域を出なかった本遺跡の性格が、今回の調査によって、南に隣接する大賀世古墳の存在と相まって、1つのまとまった古墳群であった確証を得たと共に、埴輪研究のうえに大きな成果がありました。

また、河内平野中央部若江地区に所在する若江遺跡の調査は、若江城跡の中心部に近い地点の調査で、16世紀ごろの土塹・掘立柱建物跡をはじめ大溝が検出され、とくに大溝の発見は、これまでの調査で確認してきた大溝と共に、城塞跡の規模の推定のうえに、貴重な手がかりを得ることができたことは、大きな成果であったと考えます。

なお、調査の実施にあたりましては、関係各位からのご協力をいただきました。ここに深くお礼申しあげるとともに、本書が研究資料として広く活用されればこのうえない喜びです。

昭和57年3月31日

東大阪市教育委員会

教育長　秀平勇造

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が昭和56年度に国庫および府費の補助を受け、発掘調査を実施した半堂遺跡、若江遺跡の調査報告書である。
2. 調査の期間は、昭和56年4月27日から5月23日までであり、その後、整理作業を行った。
3. 調査の主体である東大阪市教育委員会事務局文化財課の組織は次のとおりである。

(昭和56年5月23日現在)

社会教育部参事(文化財課長)	寺澤　勝
文化財課 主幹	小川　清嗣
同　課主任	原田　修
同　課	下村　晴文
同　課	成尾セツ子

4. 半堂遺跡の調査は、原田　修が担当し、上野利明が補助した。
5. 若江遺跡の調査は、下村晴文が担当し、東大阪市遺跡保護調査会上野利明が補助した。
6. 本書の文責は、本文目次末尾に記した。
7. 本書に使用した土色名および造物の色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の新版『標準土色帖』に準じ、記号の表示もそれにしたがった。また、土質名は大久保雅弥・藤田至則編著『改訂・地学ハンドブック』築地書館1976の堆積物の分類にしたがった。
8. 調査にあたっては、土地所有者の藤井光男・北岸宗太郎両氏の格別なご協力を受けた。記して謝意を表する。

本文目次

半堂遺跡	(上野)
I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査概要	4
1. 基本層序	4
2. 遺構	7
3. 出土遺物	7
IV. まとめ	14
若江遺跡	
I. 調査に至る経過	(下村) 15
II. 位置と環境	(上野) 16
III. 調査概要	17
1. 基本層序	(上野) 17
2. 遺構	(上野) 17
3. 出土遺物	(下村) 22
IV. まとめ	(上野) 28

図版目次

図版1 半堂遺跡遺構	1. 墳丘基底部(南 より)	図版7 半堂遺跡人物
	2. 墳丘基底部(南 西より)	図版8 半堂遺跡人物
図版2 半堂遺跡遺構	1. 遺物出土状況	図版9 半堂遺跡人物
	2. 遺物出土状況	図版10 半堂遺跡大刀
図版3 半堂遺跡遺構	1. 遺物出土状況	図版11 半堂遺跡短甲
	2. 遺物出土状況	図版12 半堂遺跡琴
図版4 半堂遺跡遺構	1. 周濠部断面	図版13 若江遺跡遺構 1. 土塙1
	2. 第1トレンチ周 濠部断面	2. 土塙3
図版5 半堂遺跡人物		図版14 若江遺跡遺構 1. 土塙1上面備前 焼窯出土状況
図版6 半堂遺跡人物		2. 土塙2内瓦質火 窯出土状況
		図版15 若江遺跡遺構 1. 捩立柱建物柱穴

図版16 若江遺跡遺構	2. 土塁4 1. 大溝(南より) 2. 溝、土塁4	図版22 若江遺跡遺物	陶器(擂鉢、鉢)、磁器(碗)、石鍋、軒丸瓦、瓦質土器(火舎、擂鉢)
図版17 若江遺跡遺構	1. 溝全景(北より) 2. 溝全景(北より)	図版23 若江遺跡遺物	1. 磁器類(碗) 2. 陶器(擂鉢、鉢、壺)
図版18 若江遺跡遺構	1. 溝西側石組 2. 溝西側石組	図版24 若江遺跡遺物	1. 陶器(備前焼甕) 2. 陶器(備前焼甕底部)
図版19 若江遺跡遺構	1. 溝掘方 2. 溝掘方	図版25 若江遺跡遺物	1. 瓦、ミニチュア羽釜、瓦質擂鉢 2. 鬼瓦
図版20 若江遺跡遺物	土師器皿		
図版21 若江遺跡遺構	1. 土師器皿 2. 古銭		

挿 図 目 次

半堂遺跡

第1図	遺跡周辺図 (1/1000)	3
第2図	トレンチ位置図 (1/800)	4
第3図	遺構平面図、断面図 (1/125)	5
第4図	井戸実測図 (1/25)	6
第5図	人物1 実測図 (1/4)	8
第6図	人物3 実測図 (1/2)	10
第7図	大刀実測図 (1/2.5)	11
第8図	短甲実測図 (1/3)	12
第9図	須恵器実測図 (1/4)	13

若江遺跡

第1図	調査地点位置図 (1/25000)	16
第2図	土壤状遺構実測図 (1/100)	18
第3図	遺構平面、断面実測図 (1/80)	18・19
第4図	溝状遺構実測図 (1/40)	20
第5図	大溝実測図 (1/80)	21
第6図	出土遺物実測図 (1/3)	23
第7図	出土遺物実測図 (1/3、1/12)	24
第8図	古銭拓影 (1/1)	25
第9図	大溝位置図 (1/900)	27

半堂遺跡発掘調査概報

I. 調査に至る経過

半堂遺跡は、昭和35年、永塚工業株式会社工場建設工事の際に、多量の埴輪、須恵器が出土したことから知られるようになった。この時に、部分的ではあるが発掘調査が行われ、地表下約20cmの黒色粘土層より遺物が出土した。出土した埴輪は普通円筒埴輪と、人物、動物、衣蓋、盾などの形象埴輪があり、東大阪市域における数少ない埴輪の資料として注目されている。^{注1}

半堂遺跡の範囲内には大賀世古墳があり、円墳と考えられているが詳細は不明である。周囲に溝や池があり周濠との見解も出されている。大賀世古墳は、当遺跡発見の契機となった先の埴輪出土地点の南約250mの位置にあり、これらの埴輪が大賀世古墳に関連すると考えられていたが、出土状況等からも別の古墳の存在を考える要素をもっている。

当遺跡を含め、周辺一帯は近年の宅地開発の波を受け、住宅建設が盛んになっている。そのため、小規模な試掘調査も実施されている。工事中に発見された例もあり、須恵器の大甕、中世の土器などが確認されている。この事から、当遺跡は古墳時代以後の集落があった可能性が考えられる。

今回、発掘調査の契機となったのも住宅建設である。昭和56年3月に東大阪市教育委員会へ、東大阪市六万寺町1丁目186・187において住宅建設の届出があり、協議の結果、先づ試掘調査を実施した。試掘調査では、現地表下約20cmで遺物包含層を検出した。このため、本調査が必要との判断に基き、大阪府教育委員会、文化庁に通知し、土地所有者との協議を経て、昭和56年度国庫補助事業として東大阪市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することとなった。

注1 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡第1・2部』1966。



永塚工業敷地内出土遺物

II. 位置と環境

半堂遺跡は、東大阪市六万寺町一帯に広がる弥生時代から古墳時代にかけての遺跡である。東大阪市の東方には南北に生駒山地がつらなり、西麓は標高約80m付近までは急傾斜を保ち、以下はなだらかな丘陵地帯となる。そして、生駒山地より西流する急流性の小河川によって形成された扇状地が広がっている。扇状地は現在の国道170号線（外環状線）付近を境として平野部に移行する。当遺跡は、この丘陵地帯の標高20~30mの地点に立地している。

当遺跡内には大賀世古墳と、多数の埴輪の出土から、削平されたと推定される古墳の2基の古墳が存在している。大賀世古墳は調査地点の南南西約100mにあり、大賀世神社が墳頂部に建てられている。調査はされていないが、周囲に幅広い溝や池が残っており、古墳の周濠と考えられている。もう一基の古墳の遺物は6世紀初頭頃に比定することができる。

また、周辺の古墳では東方約400、600mに常光寺古墳、浄土寺谷古墳がある。ともに横穴式石室をもち、6世紀後半の古墳である。北方では北東約700mに二本松古墳があり、昭和39年に調査が実施されている。左片袖式の横穴式石室を有する方墳で、須恵器、耳環、鉄製品が出土した。遺物より6世紀後半の築造である。二本松古墳の北東約200mには高塚古墳がある。直径約22mの円墳で、墳丘は完存しているが調査が行われていないため、時期は不明である。南では、八尾市城に入るが西ノ山古墳、心合寺山古墳、花岡山古墳のような前・中期の前方後円墳を含む楽音寺、大竹古墳群があり、後期まで続いている。

以上のように、当遺跡周辺では大型古墳、あるいは群集墳ではなく、6世紀以後の小型の単独墳があるのみである。

一方、古墳時代の集落遺跡としては、绳手遺跡、北鳥池遺跡、池島遺跡、岩滝山遺跡、馬場川遺跡が挙げられる。これらの遺跡は布留式土器併行期から6世紀中頃までの遺構、遺物が確認されている。しかしながら、古墳時代前期の遺跡は確認されていない。

このように、前期の遺跡が見られずに布留式土器併行期以後に限られているという事実は、えのき塚古墳が築造された中期中頃以後に古墳が築造され始めるという事実と無関係ではなく、大規模な集落が見られないことも合せて、当地域の古墳築造に現われた社会体制を見ることができよう。しかしながら、6世紀後半以後に築造が開始される山畠古墳群の存在は、単独墳として存在する当遺跡周辺の状況と対照的であり、今後に大きな課題を残している。

注1. 「枚岡市六万寺町二本松古墳の調査」枚岡市文化財調査報告1 1965。

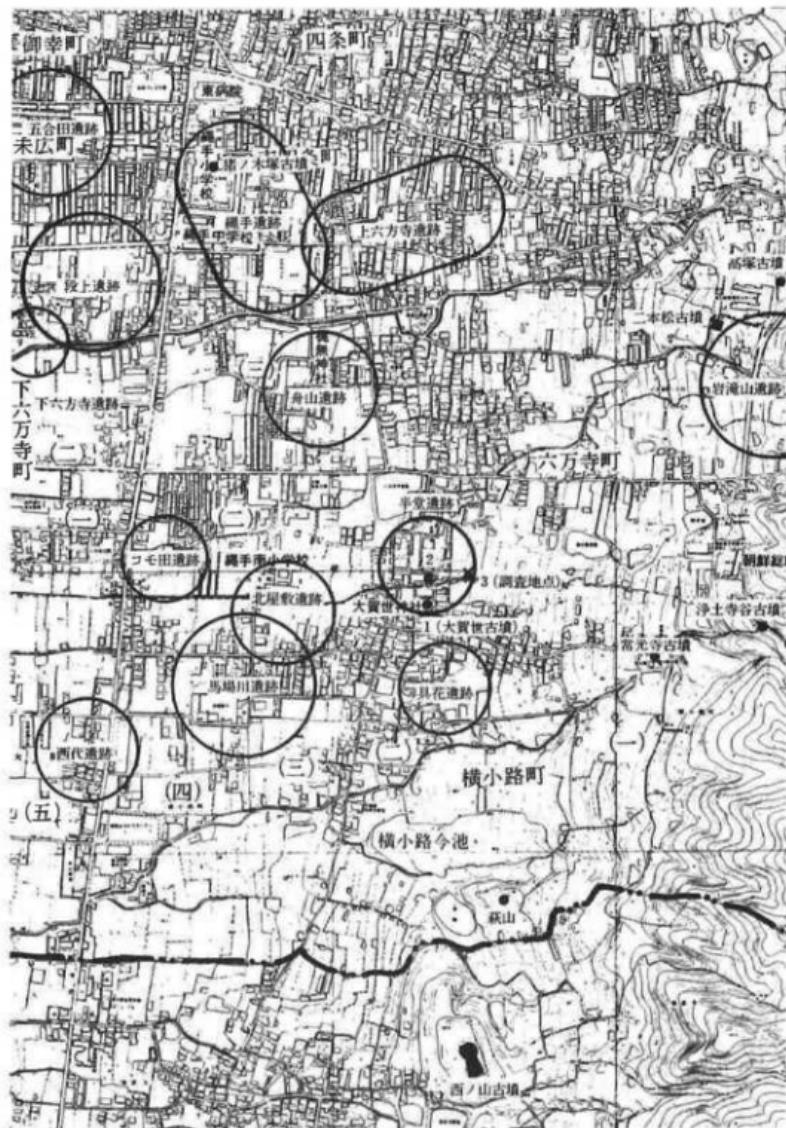
2. 藤井直正、原田修「绳手遺跡1」東大阪市遺跡保護調査会 1971。

中村友博、原田修、下村晴文、庄司都夫「绳手遺跡2」東大阪市遺跡保護調査会 1976。

3. 阿部嗣治、上野利明「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概報」「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集」1980年度 1981。

4. 「馬場川遺跡I~IV」埋蔵文化財公庫地調査概報4~16 1970~1976。

5. 原田修「山畠古墳群1」東大阪市文化財調査報告書第1号 1973。



第1図 遺跡周辺図 (1/10000)

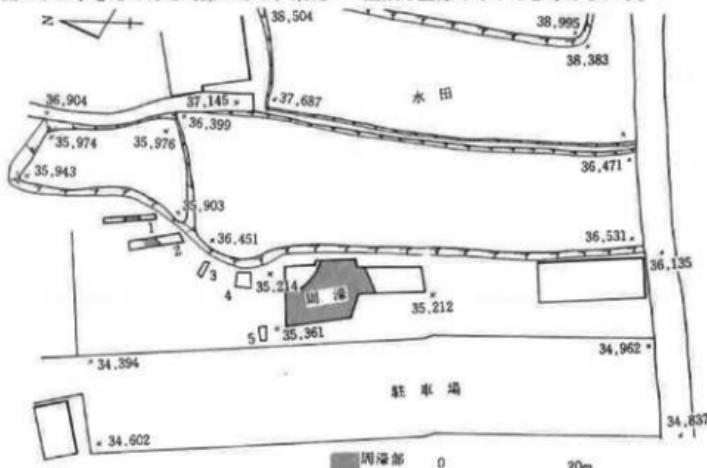
III. 調査概要

1. 基本層序

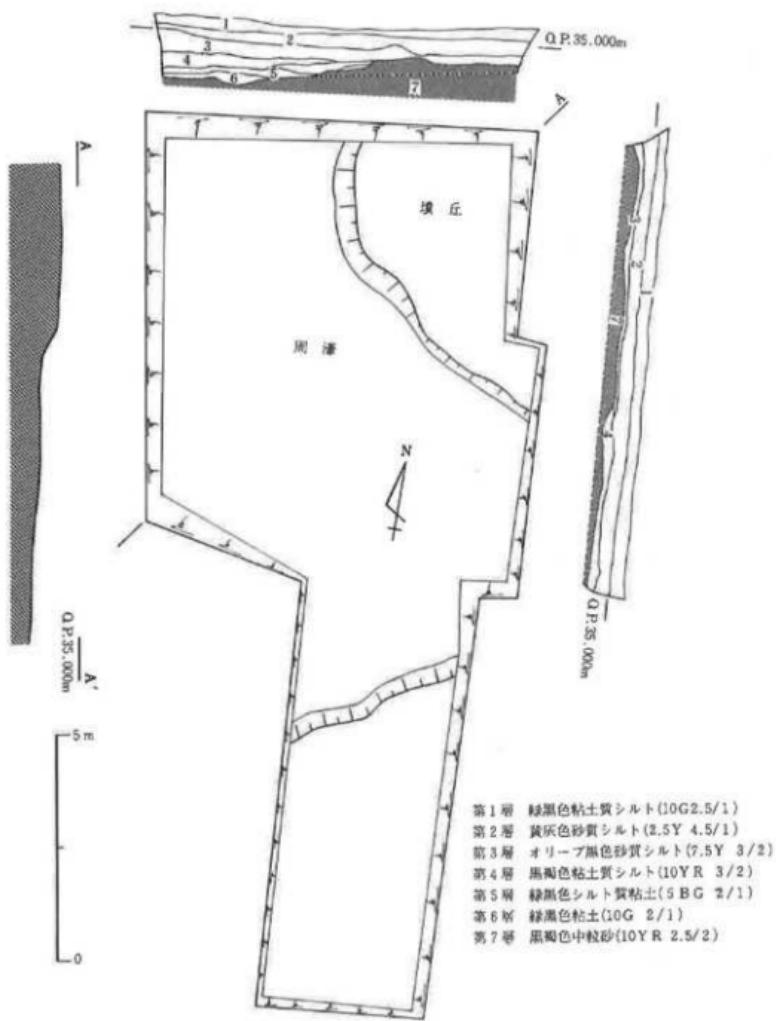
今回発掘調査を実施した範囲の基本層序は以下の通りである。

- 第1層 緑黒色粘土質シルト（耕土） 砂混り。
- 第2層 黄灰色砂質シルト（床土） 中～粗粒砂混り。
- 第3層 オリーブ黑色砂質シルト 中～粗粒砂混る。小礫少量混る。古墳時代、中世の土器片多量に出土。西側に厚く堆積する。
- 第4層 黒褐色粘土質シルト 中～粗粒砂を多量に含む。古墳時代の土器片多量に出土。西側に向って傾斜し、やや厚く堆積する。
- 第5層 緑黒色シルト質粘土 中～粗粒砂混る。周濠内の堆積物で、西に向って傾斜する。古墳時代の土器を含む。
- 第6層 緑黒色粘土 細～中粒砂少量混る。周濠内の堆積物で、トレンチ西側に部分的に堆積する。古墳時代の土器片少量出土。
- 第7層 黒褐色中粒砂 粗粒砂～中礫が多量に混る。古墳のベースとなる。

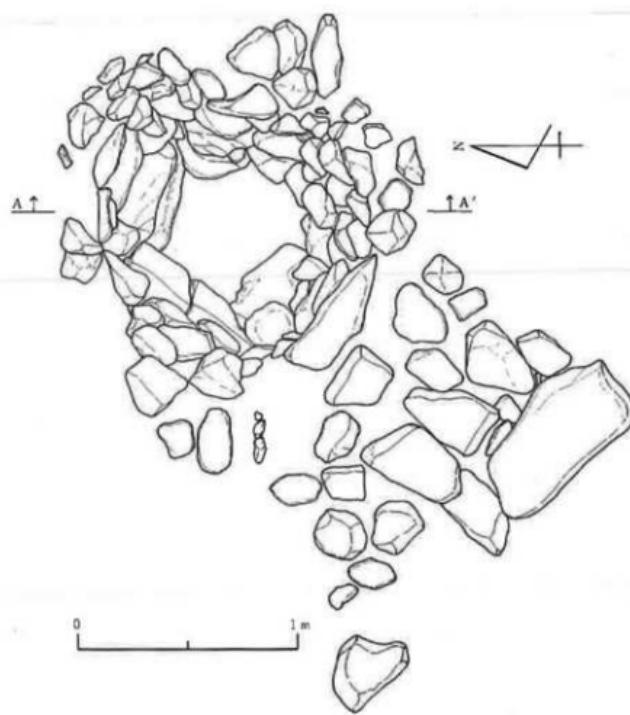
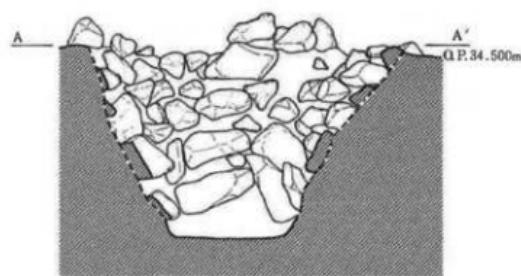
第3・4層は古墳が削平された際の整地層である。削平後は第3層上面で井戸が造られている点から生活面となっていた事が理解できる。第5・6層は古墳の周濠内の堆積物である。北側で試掘を行った結果、周濠を確認しているが、この地点では第5・6層の堆積は見られず、この2層は、周濠部でも最も低い範囲 — 西側にのみ堆積していたと推定される。言い換れば西側のみに水をたたえた周濠があり、東側 — 上段は空濠であったと考えられる。



第2図 トレンチ位置図 (1/800)



第3図 透構平面図、断面図 (1/125)



第4図 井戸実測図 (1/25)

2. 遺構

古墳基底部（第3図）

調査地北東隅で削平された古墳の一部を検出した。すでに第7層—地山面まで削平されている。現状では南東から北西に向ってほぼ直線状にのび、北西端で北側に向きを変え、弧を描く。周囲はなだらかに傾斜し、周濠となっている。周濠の外側は調査範囲内で確認できなかった。周濠最深部と、基底部削平面の比高は75cmである。なお、調査地南側で検出した北東から南西にのびる段は、基底部に沿っておらず、周濠の外側とは考え難い。

この周濠は北側で試掘を行った結果、第1・2トレンチで確認した（第2図）。深さは約40cmで、2ヶ所とも北東から南西に向って周濠がめぐる。幅は約2.5m以上となる。両トレンチの周濠内の堆積物に第5・6層は無く、第4層があるところから、この地点における周濠は空濠であった可能性が高い。

検出した周濠の位置から推定すると、少なくとも円墳と考えられず、小型の前方後円墳の可能性が高い。基底部はわずかに弧状を呈しているものの、直線的な部分もあり、前方部端と推定できる。また、北東側で張り出している上段の水田面が円弧状である点は後円部のなごりとも考えられる。

基底部には内部施設の痕跡は無く、遺物も確認できなかった。周濠内の堆積層からの遺物は少なく、大半が古墳削平時の整地層である第3・4層から出土した。

井戸（第4図）

周濠上の第3層上面で検出した。石組みの井戸である。直径約1.4m、深さ約0.9mの逆台形の断面を呈する。石組みは、掘り方の最深部より壁に接して長さ40~50cmの自然石、割石を5角形に置き、上部まで20~30cmの自然石を螺旋状に積み上げている。井戸の北西側は、面をもった30~80cmの自然石を乱雜に並べている。

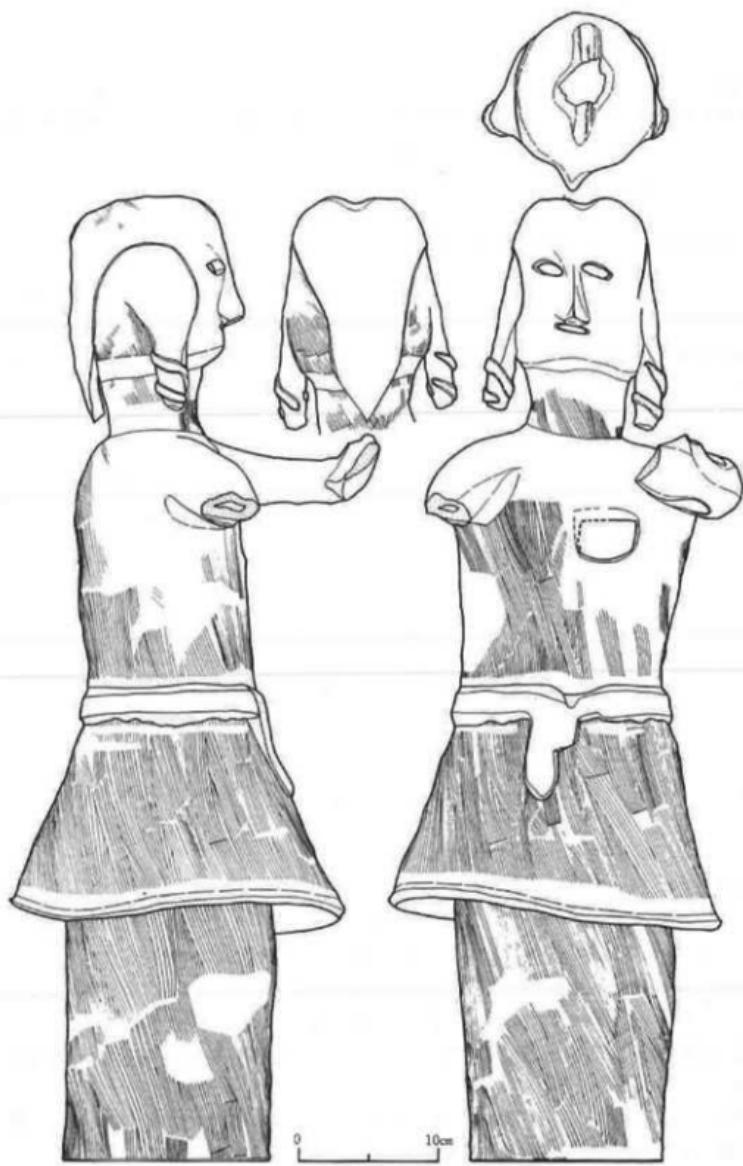
生駒山地西麓の低位段丘、および崩壊地で発見された井戸は大半が2~3mの深さを有しているが、この井戸の場合、1m弱と浅く、第7層を掘り抜いていない点から、湧水による井戸ではなく、ため井戸として使用されたものであろう。

3. 出土遺物

大半が古墳に伴う遺物である。削平時の整地層である第3・4層では奈良時代から中世の土器片を確認したが、ここでは古墳に伴う遺物をとり挙げて説明する。

古墳に伴う遺物は、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪がある。須恵器では図化できるものは少ない。円筒埴輪は大半が細片となっているため、形象埴輪の基台部と、普通円筒、朝顔形円筒の判別が困難である。底部の成形、調整技法等による区別の可能性もあるが、今回は形象埴輪の一部にとどめたい。

出土した形象埴輪は、人物、馬とその他の動物、大刀、短甲、家、衣裳、盾、琴がある。特に人物が多く、形象埴輪の個体数の半数近くにおよぶ。



第5圖 人物1実測図(1/4)

人物1（第5図）

全形のわかる人物埴輪である。半身立像で、下半は円筒形の基台となる。基台部の透孔は無い。頭部は美豆良を結い、肩近くまで垂下する。また、後頭部で髪を束ねて垂下する。美豆良は、太い粘土紐に細い粘土紐を螺旋状に巻き付けて髪の形を表現している。美豆良と頭部側面の接合部周囲にヘラによる刻線をめぐらす。この刻線は後頭部で束ねられた髪の側端へつながる。

目・口は刀子状工具で切り抜かれ、わずかに向って右下がりとなっている。頭頂部は縦方向に凹みがあり、中央に穿穴がある。被物あるいは髪等がついていたと考えられる。

左腕は肩部までほぼ水平に上げ、手の甲を前方に向けてゆるく曲げた形をとる。右腕は上腕部より先が欠損しているが、体側面をわずかに腕を曲げて垂れ下がる形となるようである。

胴部は左胸に2×1.4cmの横長の透孔がある。上衣の一部を表現したものであろうか。上衣の表現は帯のみで他にはみられない。帯は凸帯状に表わし、前で結ぶ。上衣の裾はかなり大きくなっている。

人物埴輪の成形は、先づ基台部より粘土板、粘土紐を巻き上げ、腰部で胴部と上衣の裾部を接合する。さらに肩部をつくり、両腕を差し込む、この時、頭部までは一体としてつくり、別に粘土紐を巻き上げて形づくった頭部を接合する。

外面の調整は両腕の接合部は強いナデ、胴部、基台部は右下がりのハケを施した後、部分的にナデを施す。

高さ69.8cm、基台部径14cm。灰褐色（7.5Y R 5/2）を呈し、砂粒を多く含む。焼成は堅緻。

人物2（図版8下段）

人物1と同形式のものである。成形、調成技法も人物1と同じである。美豆良の形は太い粘土紐を垂下させた形となる。にぼい橙色（5 Y R 6.5/5）を呈し、砂粒を多く含む。焼成良好。現存高19cm。

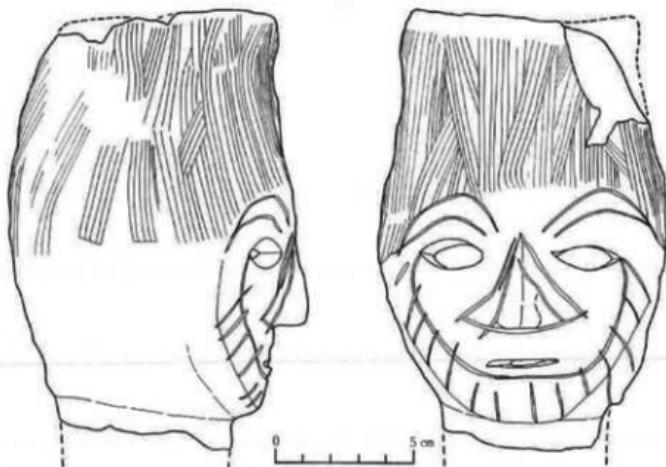
人物3（第6図）

背面の人物頭部である。頭部の髪を上方へ束ねた形となる。側頭部に剝離痕がみられるが、耳の表現であろう。顔面の入墨はヘラ状工具による沈線で表わされる。両目の外端から口の下部を結ぶ環状の沈線があり、その周囲の額から両頬にかけて斜行する短い沈線を施す。また、鼻の周囲に、眉間から鼻下にかけて三角形に沈線を施す。目の上部に2本の沈線があるが、これは入墨を表わしていると考えられるが、肩を表現している可能性もある。

外面の調整は全体にタテハケを施し、下半部は強いナデによって完全にハケを消している。頭上部は頭髪を表現していると考えられる。にぼい橙色（5 Y R 7/3）を呈し、石英、長石を含む。焼成良好。現存高15.6m。

人物4（図版7下段）

人物3と同じ背面の人物である。髪形以外は人物3と同じ入墨の形態をとる。全体的に人物3に比して幅広いつくりである。髪形は後頭部が欠損しているため全容は不明であるが、小さい美豆良があったと考えられる。額からほぼ水平に後頭部にかけて波形の沈線があげられ、後頭



第2図 人物3実測図 (1/2)

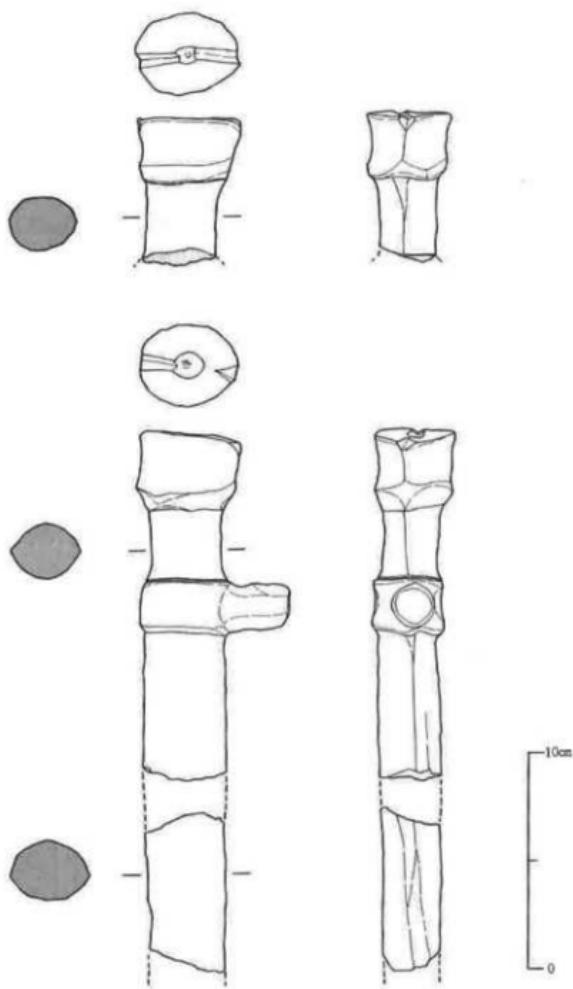
部付近で垂下する。にぶい褐色 (7.5Y 6/3) を呈し、石英、長石を含む。焼成良好。
 黒面の人物は、和歌山県井辺八幡山古墳、福岡県八女郡立山1号墳、奈良県磯城郡石見遺跡、
注1
 大阪府高石市大園遺跡等で出土している。これらについて森浩一氏は入墨の形態により2種類
注2
 に分類し、本例の入墨を「顔面環状入墨」と称している。本例に見られる「顔面環状入墨」は、
注3
 両目の上に2本の沈線を施し、顔面をめぐる沈線の外側に斜行する沈線を施す点から、大園遺
注4
 跡例に近く、次いで石貝遺跡例に近い。

人物5 (図版8上段)

女性の人物頭部である。他の人物頭部に比して小型で、頭頂部を島田櫛風につくる。耳は外側より径8mm、深さ9mmの円孔で表わす。この円孔は内側まで貫通しない。外面の調整は丁寧なナデ、内面は丁寧なヨコナデを施す。頸部と顎の接合部内面は殆ど調整されず、頸部以下と頸部を分割して整形した後に接合したと推定できる。にぶい橙色 (7.5Y R 7/4) を呈し、石英、長石を多く含む。焼成は不良。

大刀 (第7図)

同形の2点が出土した。1は把から鞘部まで残り、鞘尾が欠損している。2は把頭から把間までの破片である。1、2ともに把頭はわずかに反り、把間から鞘にかけては直線的である。把縁には円筒形の突起がつく。把間と把縁の境にはヘラ状工具による沈線がめぐる。把頭端面は楕円形を呈し、中央に円孔を穿ち、長軸方向に一条の溝をつくる。把間から鞘部は楕円形の断面を呈し、上下両側にしのぎと思われる明瞭な稜をもつ。把縁の突起は径2cmの円柱状で、



第7圖 大刀実測図 (1/2.5)

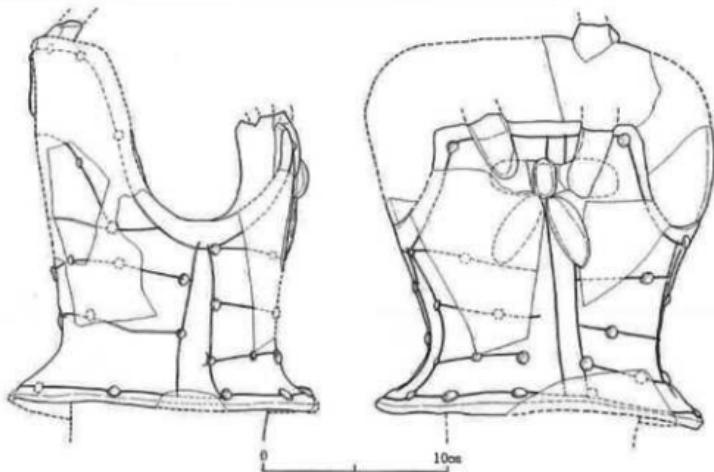
把縁に対し直角に装着されている。

把頭、把縁はヘラ削り後強いナデを施す。把頭端面はヘラ切り後、円孔、溝をヘラによって刻む。円筒の突起はナデ、把間および鞘はヘラ削りする。明褐灰色（5 YR 7/2.5）を呈し、石英、長石を多く含む。焼成は堅緻である。

大刀形埴輪は通常の場合、飾大刀として装飾的な表現をもった形か、あるいは武人埴輪に帯びた形でつくられている。本例は装飾的な表現はなく、非常に写実的につくられ、天理参考館所蔵品の武人埴輪に帯びた大刀と類似する。注6これは把部が欠損しているが、円筒の突起を有し、鞘部が偏平ではなく、楕円形の断面を呈している。この種の大刀は把頭端面の溝・円孔・把縁の特徴等から、鹿角外装の大刀を模倣したものと考えられる。鹿角外装の刀劍は、その形態から末永雅雄氏によって集成、研究されており、今、この成果を當てるに、鹿角外装の第1類に近い形態をとる。しかし、本例が大刀である事、把頭装具の断面が円形に近くなるなど、第2類に近い要素も含まれている。注7鹿角外装の刀劍が木製品として模倣される場合、奈良県布留遺跡出土例のようにかなり忠実な例もみられるが、埴輪においては、後述する短甲形埴輪と同様、簡略化され、形態のみの模倣に終わる傾向が認められる。

短甲（第8図）

横矧板銈留短甲を模倣したものである。基台部は欠損している。短甲部の後胴の高さは推定で19.8cm、前胴の高さ15.6cmである。横矧板の表現はヘラ状工具による刻線、銈留は円形浮文で表現する。左右と中央に縱方向の刻線が2本ずつみられるが、これは蝶番と引合の表現であ



第8図 短甲実測図 (1/3)

ろう。したがって左右が開閉する形式のものと考えられる。また、ワタガミの受緒、懸緒が表現され、欠損しているが、原形はつながっていたものであろう。

鉢は刻線の真上に貼り付けられており、本来の鉢留短甲に見る位置とは異なっている。埴輪の場合、殆どの場合が本例と同様であり、埴輪として模倣する場合、大刀の場合と同様に忠実に行われていない傾向がうかがえる。

須恵器甕1（第9図1）

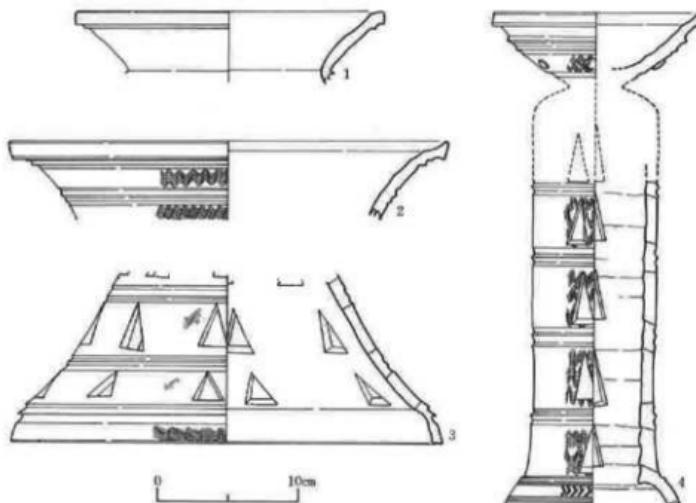
口縁部の破片である。比較的長い口縁部をもち、外上方へのびる。口縁端部は角度を変えてわずかに外折する。口縁端部外面は下方へ折り返した後、強いヨコナデにより尖り気味にわずかに垂下し、さらに下方に1条の凸帯をもつ。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。灰色（10Y 4.5/1）を呈し、細かい長石を少量含む。焼成堅緻。口径21.8cm。

須恵器甕2（第9図2）

長く外反する口縁部である。口縁端部外面は面をもち、下方へ丸みをもって垂下する。外面に3条の凸帯をもつ。凸帯間に2条の波状文を施す。凸帯の断面は強いヨコナダのため鋭い三角形を呈する。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。内面に自然軸がかかる。灰色（10Y 5/1）を呈し、細かい長石を含む。焼成堅緻。口径31.0cm。

器台脚部（第9図3）

外反する脚部から内方へ屈曲する裾部へ続く。端部は凹面をもつ。屈曲点外面に一条、上方に2条の凸帯がもち、裾部最下段に明瞭な波状文、上部に部分的に波状文を施す。また三角形



第9図 須恵器実測図（1/4）

の透孔を上下一直線上に配する。透しは1段に8個と推定できる。灰色(N5.5/0)を呈し、細かい長石を含む。焼成堅緻。底径30.4cm。

筒形器台(第9図4)

壺状部と柱状部の破片である。壺状部口縁部はわずかに内湾しながら外上方にのび、端部は外側に面をもって終わる。下方には断面三角形の凸帯を有し、2条の波状文と円形浮文を配する。柱状部はほぼ垂直にのび、断面三角形を呈する凸帯によって少なくとも5段に区分される。各凸帯間には3条の波状文が施され、三角形の透孔が上下一列に配される。柱状部と台状部の境は明瞭で、台状部は内湾しながら外下方へ広がる。台状部の透孔は不明である。台状部上端にケシ状工具による列点文が施されている。内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残る。灰色(N4.5/0)を呈し、1~2mm大の長石を多量に含む。焼成良好。口縁部径14.3cm。

- 注1. 森浩一「井辺八幡山古墳」同志社大学文学部考古学調査報告第5号 1972。
2. 九州考古学会編『北九州古文化園』2 1951。
3. 末永雅雄『三宅村石見遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』13 1935。
4. 『大園遺跡』高石市文化財調査概要1976-1 1977。
5. 注1に同じ。
6. 三木文雄編『日本の美術 一 はにわ』No.19 P.44 至文堂 1967。
7. 末永雅雄『増補日本古代の武器』木耳社 1981。
8. 天理参考館学芸員置田雅昭・竹谷俊夫両氏の御教示による。

IV.まとめ

1. 今回の調査で検出した古墳は、円墳ではなく、前方後円墳の可能性が高い。また、周濠部は西側のみが水をたたえられており、南・北は空濠であったと推定される。
2. 半堀遺跡として周知されている範囲には、本例の如く古墳が削平された際の整地層を包含層として確認されている箇所も多い。今回の調査例から考えると、西側に近接する永塚工業敷地内の埴輪出土地点も古墳の周濠部と考えられる。したがって、大賀世古墳を1号墳、永塚工業敷地内のものを2号墳、本例を3号墳として、大賀世古墳群と称したい。^{注1}
3. 3号墳出土の遺物は共伴した須恵器がTK208形式に近いと考えられ、5世紀末頃に比定できる。しかしながら、形象埴輪の器種・器形は6世紀初頭の要素を持っている。今後、詳細を検討を加えたい。
4. 人物埴輪にみた成形・調整技法は共通性のあるものが多く、同一工人の手になるものと考えられる。今後、2号墳出土埴輪等との比較検討により工人集団の把握が可能になると予想される。

注1. 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園研究論集第10号 1966。

若江遺跡発掘調査概要

I. 調査に至る経過

東大阪市若江地区には、東大阪市教育委員会発行の遺跡分布図によると、若江城を中心にして、若江寺跡、若江北遺跡、若江郡衙跡、巨摩廬寺跡などの遺跡が複合して存在している。これらの遺跡は、性格、規模とも不明確な点も多く、時期的に重複する部分も多いところから、現在では大きく若江遺跡の名で呼ぶことにしている。若江遺跡の中でも、若江城に関する発掘調査は近年著しく増加している。若江城は、14世紀末から16世紀末までの約200年間にわたって河内国の守護代の居城として重要な役割を果していた。しかしながら、若江城に関する史料は非常に乏しく、正確な範囲やどの程度の城塞を築いていたのか全くわからなかった。

昭和47年に東大阪市立若江小学校校舎増築工事に伴う調査で、若江城の時期に関するものと若江城築城以前のものが複合して出土した。このことは、築城以前に集落があり、それを潰して築城されたことがわかった。その後、若江公民館の北側及び今回の調査地点の北側で発掘調査が実施され、若江城に関する建物跡と思われる柱跡、埠列などが検出された。^{注1} しかしながら城跡周辺は現在では民家が建ち並び、広範囲の調査は不可能な状態であった。昭和49年から始まった、府道四条一長堂線拡幅工事に伴う発掘調査は、比較的広範囲の調査であり若江城の南側を東西に細長くトレチを設定した。この結果、幅7m以上、深さ2m以上の若江城の濠と考えられる遺構を検出した。濠の全貌は不明であるが、若江城の規模を知る上で貴重な発見となった。若江城の調査は、これまでに約5,500m²を実施しているが、全体からみればまだごく僅かであり、今後の調査に期待がかけられていた。

昭和56年2月5日付で東大阪市教育委員会へ藤井光男氏より東大阪市若江本町4丁目71-8番地において居宅を改築したい旨の届出があった。本市教育委員会では、届出に係る土地が、周知の若江遺跡の範囲内に含まれるところから、発掘調査の必要があると判断し、大阪府教育委員会並びに文化庁へ通知するとともに、その指示を待って藤井氏と埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて協議をおこなった。この結果、昭和56年度の国庫補助事業として東大阪市教育委員会の主体で発掘調査を実施することになった。

調査の実施にあたっては土地所有者の藤井光男氏には大変お世話になった他、東部産業株式会社の関係者の方々にご協力をいただいた。記してお礼申しあげます。

注1.『東大阪市文化財要覧Ⅱ』東大阪市教育委員会 1973。

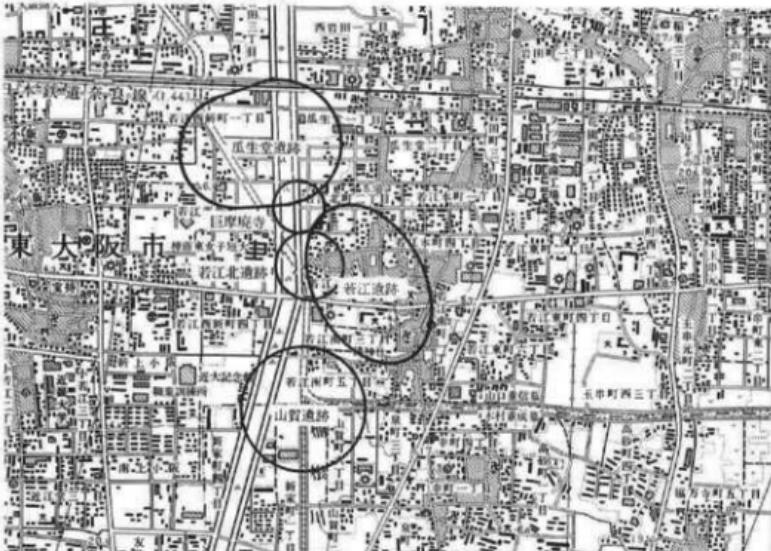
注2. 藤井直正・下村晴文・勝田邦夫 『若江寺・若江城跡発掘調査概要』東大阪市教育委員会 1975。

II. 位置と環境

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯に広がる弥生時代から安土・桃山時代にかけての複合遺跡である。

若江遺跡が立地している河内平野は、旧大和川と淀川の堆積作用により形成された沖積平野であり、東大阪市域のある河内平野南部は旧大和川の影響が特に強い地域である。旧大和川は現在のように大阪湾に向けて西流せず、思智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川の大小の河川に分かれて流れ、それぞれの河川の周囲には、自然堤防や微高地が形成されており、弥生時代から人類の営みが開始されていた。とはいえ、それら5本の河川の中で、特に楠根川の流域に遺跡が密集しており、他の河川については、近世以後（大和川付け替え以後）に集落が営まれたに過ぎない。これは、楠根川が河内平野の最も低い部分を流れる、ゆるやかな流れをもつていたという点から、他の河川域に比して安定した生活の場を提供していたと考えられる。

この楠根川流域の遺跡は、弧生時代前期から続いており、山賀遺跡、瓜生堂遺跡に初まって、西岩田遺跡（古墳時代前期）、瓜生堂上層遺跡（古墳時代中期～平安時代）、意岐部遺跡（古墳時代前期～後期）と続いている。若江遺跡は、これらの遺跡と同様に、楠根川流域に形成された自然堤防、あるいは微高地上に立地し、若江寺、若江郡衙、若江城という。この地の政治的な中心となるべき諸建築物を、その中では最も高い所に築いたと考えられる。



第1図 調査地点位置図 (1/25000)

III. 調査概要

1. 基本層序

今回の調査地点の基本層序は以下の通りである。

第1層、暗褐色砂質シルト 多量の粗粒砂と少量の中礫が混る。中・近世の土器片出土。

第2層、暗オリーブ褐色砂質シルトと灰色砂質シルトの混合層。多量の粗粒砂と1cm大の中礫が多量に混る。中・近世の土器片出土。

第3層、褐灰色砂質シルト 炭片が多量に混る。同色粘土質シルトのブロックが混る。
中世土器片多し。トレンチ西側で堆積し、部分的である。

第4層、灰黃褐色砂質シルト 粗粒砂～中礫が混る。中世土器片多し。

第5層、にぶい黄褐色粘土質シルト 細粒砂～粗粒砂、少量の細礫・中礫が混る。中世
土器片少量出土。

第2層は土壌状造構の盛土で、人為的な痕跡がうかがえる。第1層が堆積した後、上部を削平されている。第3～5層は整地されたと考えられ、各層の上面は軽く叩きしめられている。第3層は部分的で、全面に堆積していない。上面は凹凸が激しい。第4層は厚さ約15～20cmで上面は平坦である。大溝が第4層面から掘られており、第4層面で多量に検出した自然石が大溝の底で、落ち込んだ状態で多数確認した。したがって大溝より東側では第4層は無い。第5層は整地された痕跡はうかがえるものの、遺物は非常に少ない。第4層と同一層として考える可能性がある。

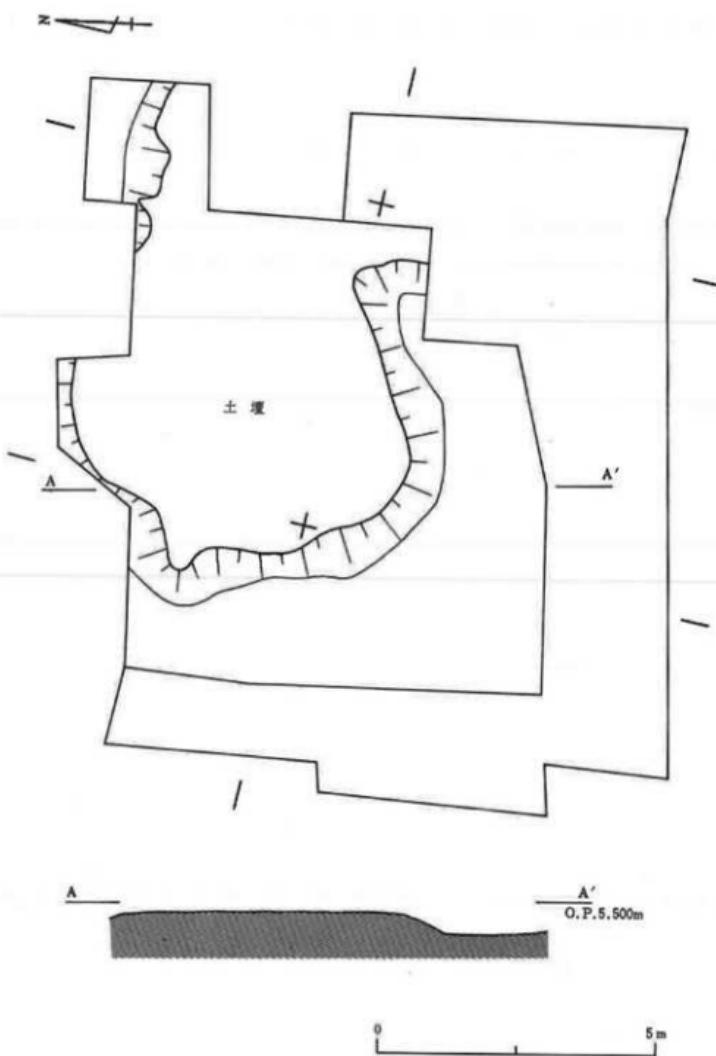
現在までの調査で、若江城の中心部と考えられる地点の周辺に厚さ約30～50cmの整地層が2層確認されている。この整地層は、各面に造構があり、特に上層では若江城の濠と推定し得る大溝が発見されている。これらの整地層は、16世紀前半に比定する遺物を多量に含み、濠の開削時期を決める資料となっている。今回の調査地点では、各整地層は厚さ約5～20cmと薄く、また3層(少なくとも)に分けられない点から、直接に対応させる事は不可能である。しかしながら、濠と推定できる大溝が掘られていることや、近接した地点での変化をして考えるならば第3～5層は、従来より確認されている2層の整地層の上層に連続するものと推定できる。

2. 造構

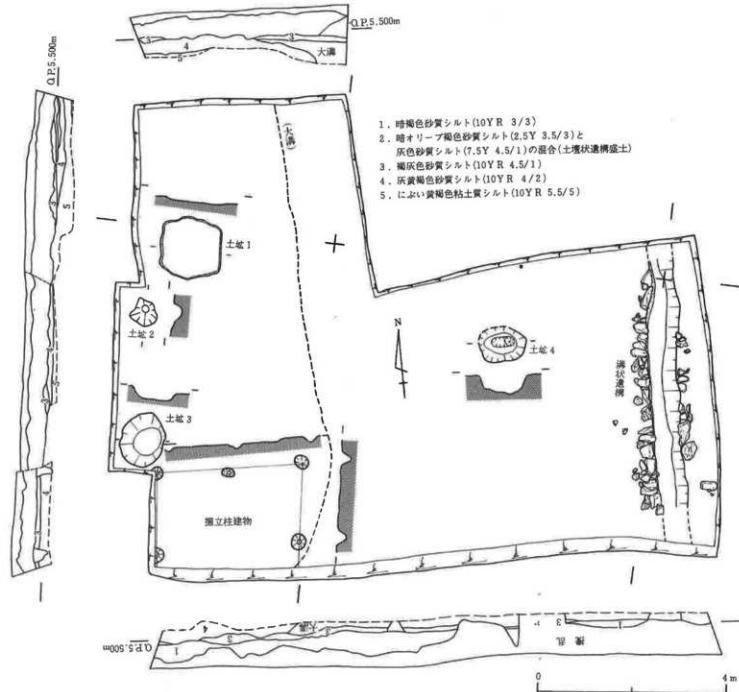
今回の調査で発見した造構は、土壌状造構1、掘立柱建物1、土塙4、溝状造構1、大溝1である。以下、順に説明する。

土壌状造構（第2図）

トレンチ東側で検出した。南北約7m、東西は確認した範囲で約9mの不整形な長方形をなし、周囲との高さは約0.4mである。南側ではトレンチ東端で南へ伸びており、かなり不整形となっている。版築の痕跡は認められない。上面に柱穴、礎石等の造構は削平された事もあって確認できなかったが、基壇とは考え難いものである。しかしながら、人為的な盛土が施されている事から建築物に伴うものではなく、用途は不明であるものの、それ以外の性格を有する



第2圖 土壠状造構実測図 (1/100)



第3図 造構平面図・断面実測図 (1/80)

ものと思われる。盛土内より中・近世の土器片が出土し、築造時期は近世以後と考えられる。

掘立柱建物（第3図）

トレント南西隅で検出した。東西2間、南北1間の建物で、計5個の柱穴を確認した。規模は南および西にさらに伸びる可能性も考えられる。方位は北10°西に向き、北よりややずれているが、後述の溝状造構、大溝とほぼ同じ方向をとる。柱穴の中心距離は160cmとやや短い。北側中央の柱穴がやや内へずれ、また南北方向の軸は北側と直交せずに否みがある。柱穴検出面は東側がやや高くなっている。北側中央の柱穴は、柱材の痕跡を留めており、一辺7cmの角材を使用している。柱穴内より時期決定の可能な遺物はなく、周辺の出土遺物から16世紀中頃に比定できる。

土塙1（第3図）

一辺約80cmの不整形な方形をなし、深さ約3cmである。底部に瓦質火舎・自然石が出土した。上部は削平を受けていると考えられる。遺物より16世紀中頃と考えられる。

土塙2（第3図）

長径30cm、短径25cmの不正円形をなし、深さ20cmのスリ鉢状の断面を呈す。土塙内に瓦質の火舎が出土した。土塙上部は備前焼大甕が1個体分細片となって散乱している。上部が削平された際に散乱したと考えられる。出土遺物から16世紀中頃と考えられる。

土塙3（第3図）

長径112cm、短径88cmの南北に長い楕円形で、深さ25cmの皿状の断面を呈する。土塙内の埋土は殆どが炭で、わずかに焼土が混入する。土塙堅は焼けておらず、炭だけで埋められたものである。出土遺物は土師器細片のみで、詳細な時期は不明である。

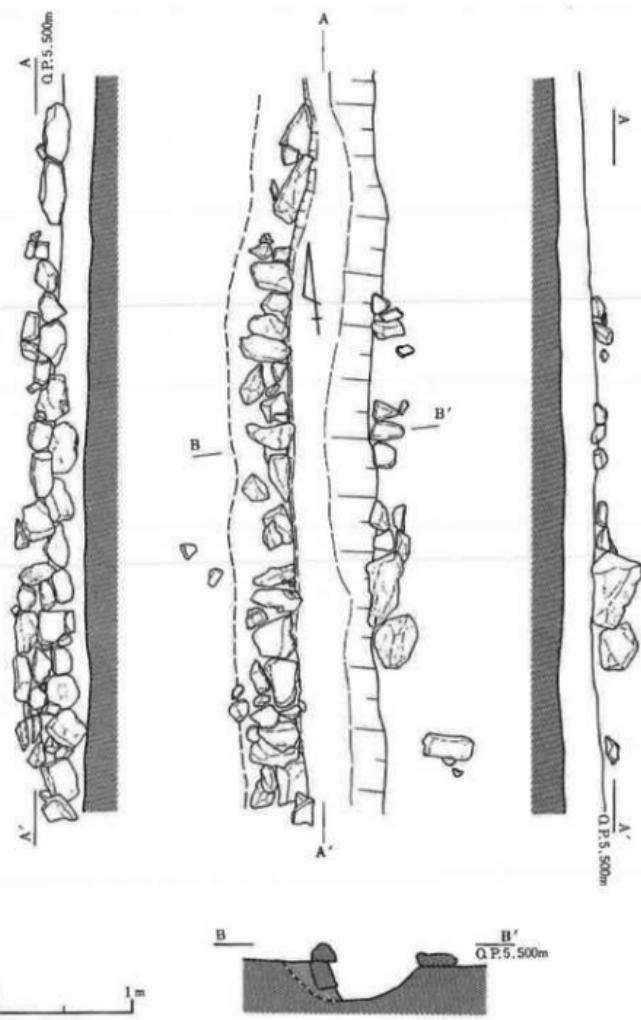
土塙4（第3図）

北側は攪乱されており、推定で長径100cm、短径70cmの東西に長い楕円形をなし、深さ50cmで2段に落ちる。土塙内には備前焼粗鉢、巴文軒丸瓦、平瓦がこぶし大から人頭大の自然石とともに投げ込まれた状態で出土した。土塙4と溝状造構は大溝が埋められた後、埋土の上に築かれており、出土遺物から、その時期は16世紀中頃と考えられる。

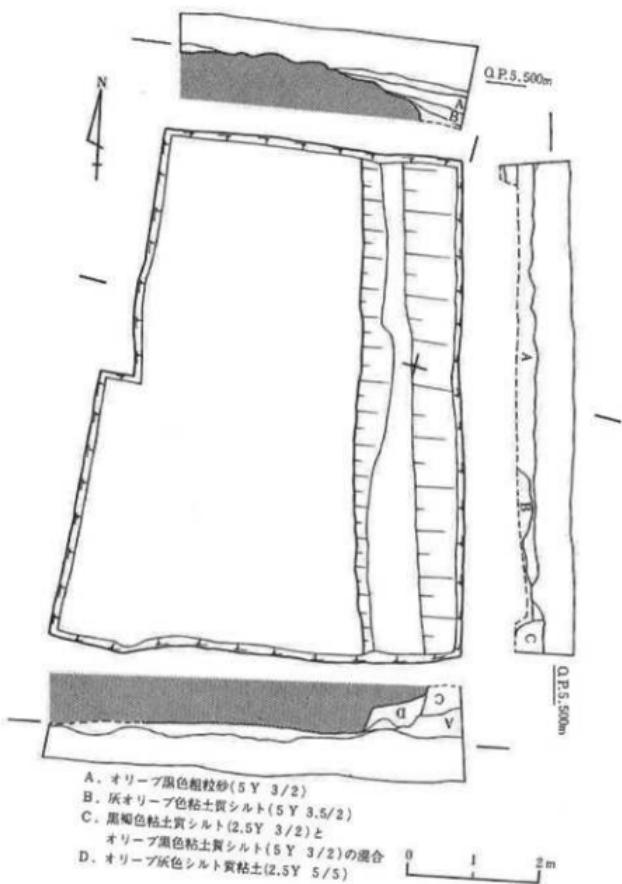
溝状造構（第4図）

北9°西の方向に伸びる。幅60cm、長さ（現状）約5.5m、深さ40cmの石組みの溝である。この石組みは東側1段、西側2～3段に積まれており、溝底面に石敷はない。上部が削平されているため、東側の石列は大半が溝内に落ち込み、原位置を保つものは少ない。西側の石列は、10～40cm大の長方形の石を使用し、横方向に積み上げる。大半が面をもった自然石で、割石が若干含まれる。石材の加工は施されていないものが多い。西側の石組みのうち、南側は3段、北側は2段となっているが、後に破壊されたためであろう。

石材の積み方は、幅1m、深さ0.3mの碗状の断面を呈する掘り方に、西側では約10cmの土を埋め、その上に石材を積み上げる。その際、石の裏側に少量ではあるがツメ石を置き、土を埋める。石材の積み方は乱雑である。東側は掘り方の肩部に石材を並べるのみで、当初より1



第4図 溝状遺構実測図 (1/40)



第5図 大溝実測図 (1/80)

段であった可能性が高い。

溝底面の傾斜は殆ど認められない。溝内の堆積物は人為的な埋土である。

以上の点から、この造構は溝としての機能を考えるより、建物に伴うものとなる可能性がある。埋土内の石組み周辺より石鍋、土師器小皿がわずかに出土した。出土遺物より16世紀中頃と考えられる。

大溝（第5図）

トレント西側で検出した。北13°西の方向に伸びる溝である。調査範囲内で東側の肩は検出できなかった。また住宅建築工事の事情のため、溝内的一部分を掘り下げるに留まった。

幅は約8mで、さらに広くなる。西側の肩はトレント南端で方向を変え、わずかに西へふれる。肩部の傾斜は2段落ちとなり、下段より急激に下がる。肩部には、第4層上面で確認したこぶし大から人頭大の自然石と同様の石が落ち込んだ状態で多量に出土した。

溝内の堆積は、確認したものはすべて人為的な埋土である。A層はオリーブ黒色粗粒砂、シルトから中礫を含む。B層は灰オリーブ色枯土質シルトで粗粒砂から中礫を含む。C層は黒褐色粘土質シルトとオリーブ黒色粘土質シルトの混合で、炭片が多量に混る。D層はオリーブ灰色シルト質粘土で中粗粒砂が混る。E層は溝掘削時の堆積と考えられ、黄褐色粗粒砂で細～中礫が混る。

この大溝は、その規模、堆積状況から考えると、昭和54～56年に調査され、確認された若江城の濠と推定される大溝とつながるものであろう。^{注2} 埋土内の出土遺物はわずかであるが、16世紀前半頃に考えられる。

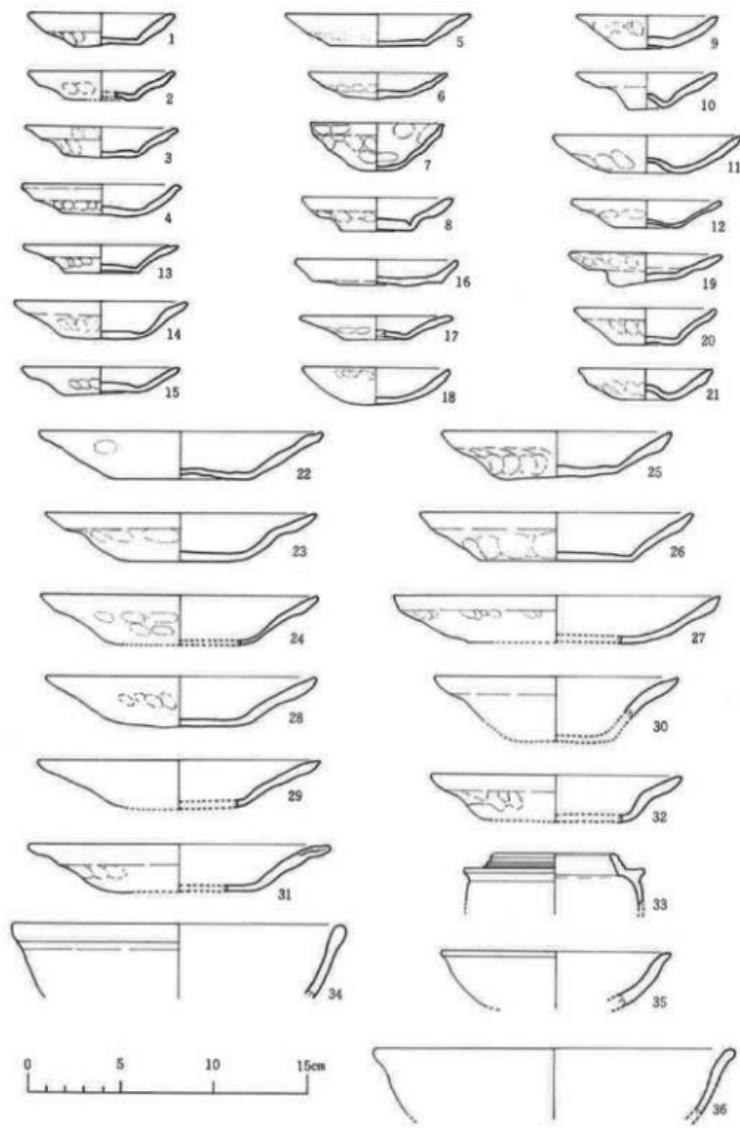
3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器皿・陶器・瓦質土器・軒瓦・鬼瓦・瓦石・石鍋・古錢などの室町時代の遺物が大半を占めている。この他に奈良時代～鎌倉時代に属する須恵器・土師器・瓦器塊・軒丸瓦なども少量であるが含まれている。ここでは、室町時代・若江城に関する時期のものを中心に記していく。調査中においては、第3層（整地層）上面において、溝状造構、大溝を検出した他、整地層についても第3層以下4層、5層に分層して遺物を取り上げた。第6層の遺物は、非常に少なく時期決定には至らなかったが、概ね層位毎の分類で整理をおこなった。なお出土遺物は、コンテナ収納箱に10箱出土している。

土師器皿（第6・7図）

口径7～8cmの小皿とそれ以上の中皿とに大別することができるが、形態上の分類は同じであるので、小皿と中皿とは区別していない。形態からAタイプ、Bタイプ、Cタイプに分類することができる。Aタイプは、口縁部が外反するものとそうでないものとでA₁、A₂に細分できる。Bタイプも内底面の突起の有無によってB₁、B₂に細分をおこなった。

A₁（1～3・5・13・14・23～26・28・32・37・38）平底でやや内弯したのち、さらに外反する口縁部をもつ。底部と体部との境を屈曲させ、体部下半はユビオサエ、上半はヨコナデを施すため、口縁部がぶ厚くなり尖って終る。第3層内出土の（1）（25）（26）が典型的な例である。



3層上面(4、7、9、11、25) 3層内(1~3、5、6、8、10、12)

第6図 出土遺物実測図 4層(13~21、28~30、33~36) 5層(31、32)

A₂(4・6・15~18・22・27・29・31・39~41) 底部と体部との境を屈曲させ、体部下半をユビオサエするのはA₁タイプと同じであるが、ユビオサエが強くなり、外上方へ延びる口縁部をもつ特徴がある。第4層出土の(15)(16)を典型的な例とする。底部と体部の境が明瞭でなく、外上方へ延びる口縁部をもつ(18)(41)などもあるが、数量が少くないためA₂タイプの中に含めることにした。

B₁(7・8・19・20) 口径に対して器高の占める割合が大きく、外形は丸味をもつタイプである。底部がわずかに平底か、丸味をもつもので、底部と体部との境が明瞭でない。第3層出土の(7)が典型的な例である。

B₂(9~12・21・42・43) 形態はB₁と同じであるが、内外面ともヨコナデを丁寧に施し、器面を平滑にしている。また、内底面に突起を有するもの及び凹み状の底部をもつことを特徴とする。第3層出土(10)、第4層出土(21)などが典型的な例である。

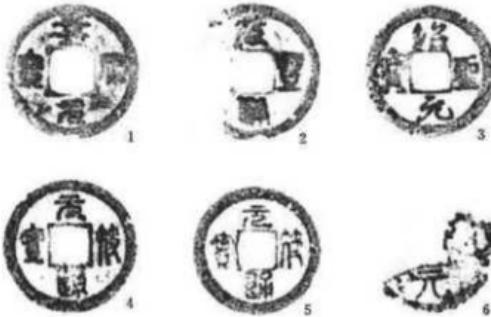
C(45~48) 平底で外上方へのびる口縁をもつ。体部内面を強く一回ヨコナデをおこなうため、底部内面と体部内面との境に稜線が認められる。溝状遺構内出土(45)(48)を典型的な例とする。

土師器皿をA・B・Cの各タイプに分けて記述を進めてきたが、Aタイプは平安時代~江戸時代まで一般的に認められる形態であり、時期的な変化に乏ぼしいタイプである。Bタイプは、鎌倉時代後期~室町時代中期に認められるもので、B₂タイプは従来「ヘソ皿」と一般に呼ばれていたものである。Cタイプは、体部内面を強く一回ナデをおこない、底部内面と体部内面との境に稜線が認められるという特徴をもっている。これは、16世紀後半以降の法量の統一化が進められた頃を境に変化したものであると解釈されている。^{注3}

陶器（第7図）

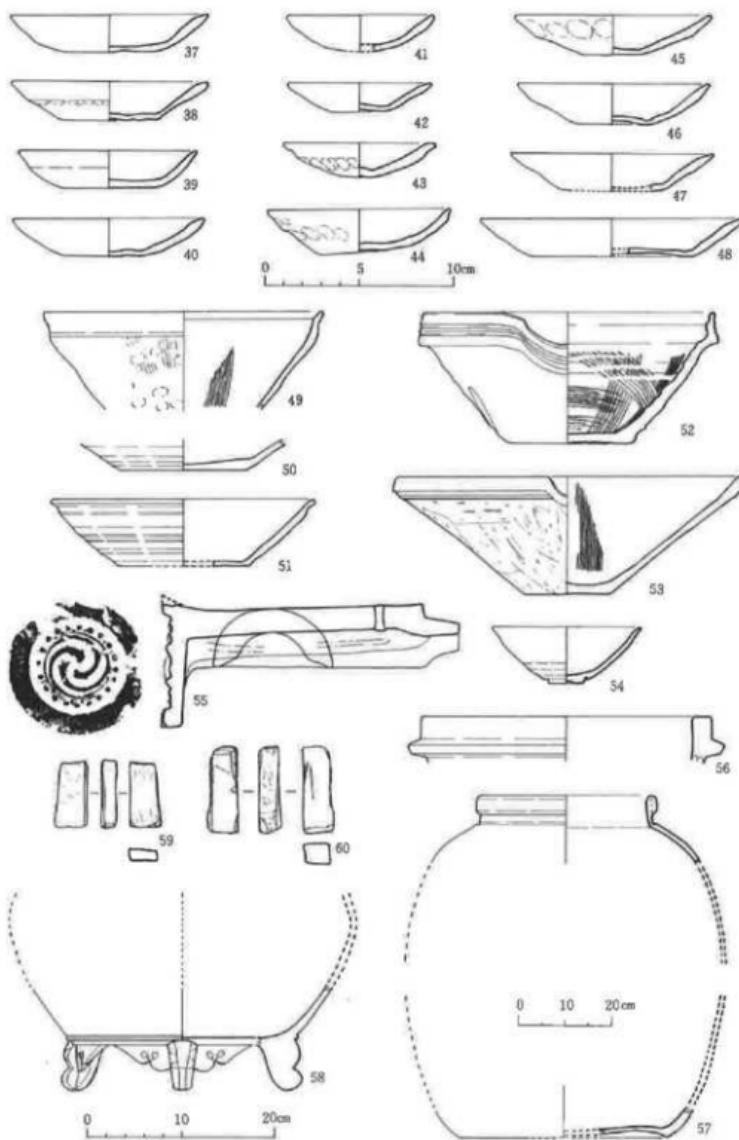
甕(57) 口縁部を下方に折り曲げ、玉縁状口縁をつくる。器面は、光沢があり硬く、やや黄味のある白や緑色の、いわゆるゴマ状の灰をかぶっている。胴部外面に目の細い刷毛目が見られ、底は薄く大きな平底である。備前焼の大甕で間壁忠彦氏編年のV期にあたる。^{注4}

攢鉢(52) 内寄気味に立上る体部に、上方に幅広く拡張され内傾する口縁端部をもつ。口縁部



第8図 古銭拓影

1. 景祐元宝(1034)溝状遺構内
2. 元豐通寶(1078)包含層内
3. 紹聖元宝(1094)包含層内
4. 元祐通寶(1088)2層内
5. 元符通寶(1098)2層内
6. 不明 包含層内



溝状遺構内(37~44, 46~48, 60) 挿立柱建物(45) 3層上面(49, 50, 57, 59)

3層内(51) 5層(53, 56) 土竪4内(52, 55)

部は丸い。体部内面に8条1単位とする条痕を施し、口縁部に片口を付ける。備前焼の擂鉢で、
間壁氏編年^{注5}のV期にあたる。

鉢(50・51)(51)は平底の底部に内窓気味に外方に延びる体部の口縁部は外反して終る。体部
外面下半と底部をヘラケズリし、体部内外面上半に釉を施す。いずれも瀬戸焼の平鉢と思われる。

瓦質土器（第7図）

擂鉢(49・53)平底の底部より体部は直線的に外方に開いた後、短く面をなす口縁部に続く。
体部内面に16条1単位(53)、10条1単位(49)とする条痕を施す。(53)は口縁部に片口を付ける。

火鉢(58)脚を有する器形である。外方へふくらむ丸味を帯びた体部を有する。脚は、入念に
ヘラでケズリ出す。3個の脚がつくと思われる。

磁器（第7図34～36・54）

実測できた4点はすべて青磁碗であるが、白磁碗と思われるものも数点ある。(54)は、断面
台形の高台がつき、体部は内窓気味に立上った後、ゆるやかに外反する口縁部に続く。口縁部
は、丸く終る。体部と底部との境をヘラケズリ、体部外面上半と内面に釉を施す。

軒丸瓦(第7図55)

左巻三巴文を内区主文とし、外区内縁に珠文を置く。巴の頭は「おたまじゃくし」状で尾は
長く巻く。瓦当上面から丸瓦部凸面を板状のもので継ナデ、瓦当裏面はナデ、瓦当接合の補足
粘土は少なく、丸瓦部凹面は接合部に一周の横ナデを施し、布目が認められる。

石鍋（第7図56）

断面台形の鉢が、口縁上端から2.4cm下がったところに付き、幅は2.0cmである。内外面を
丁寧に加工している。石材は、滑石製である。

砾石（第7図59・60）

(59)の断面長方形で長さ6.8cm、幅1.3cmを測り、各面をすべて使用している。(60)は不整形
の断面方形で長さ9.0cm、幅2.0cmを測り、上下二面を使用している。

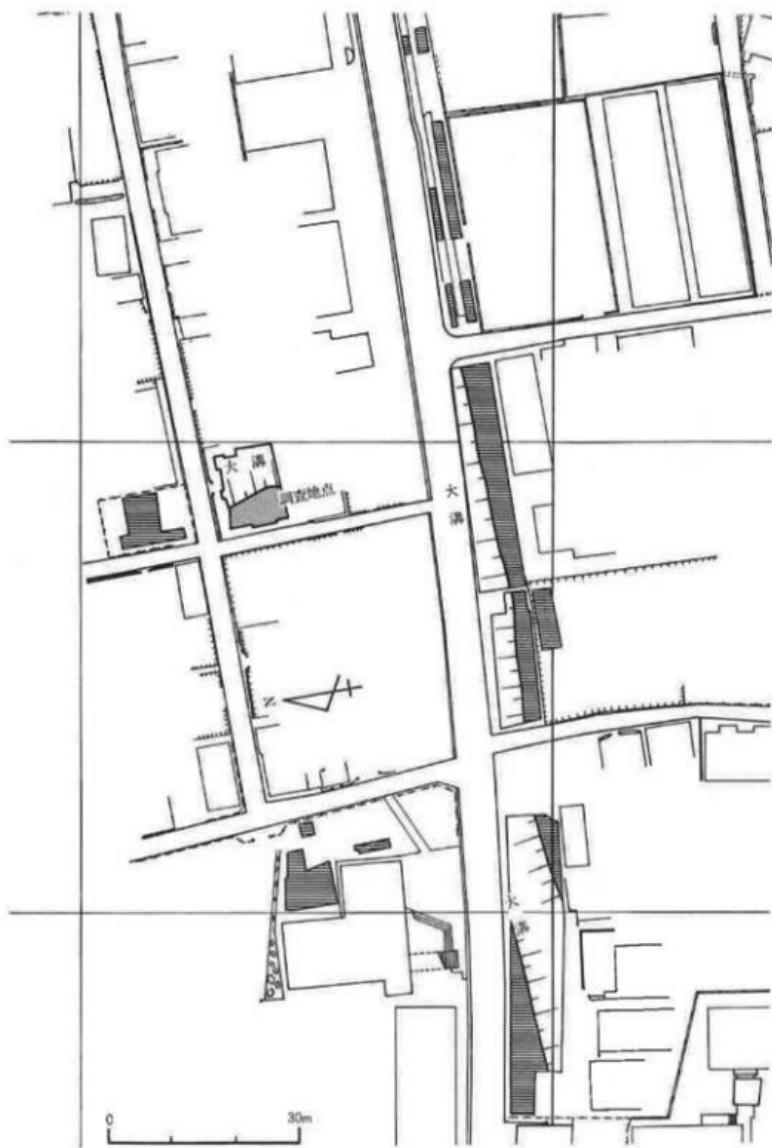
注1. 謝田邦夫・阿部禎治『若江遺跡発掘調査報告Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会 1982。

2. 注1と同じ。

3. 平良泰久・奥村清一郎・伊野近高『平安京跡(左京内膳町)』京都府教育委員会 1980。

4. 間壁忠彦『備前』『世界陶磁全集3』 小学館 1977。

5. 注4と同じ。



第9図 大溝位置図 (1/900)

IV. まとめ

若江城の中心は、從来より当調査地の西約100m、市立若江幼稚園の周辺と考えられており、^{注1}昭和49年に実施された発掘調査で廻廊跡と考えられる根石をもつ柱穴群が確認されている。しかししながら、明確な規模、建物の配置等多くの問題を残したままに現在に至っている。若江周辺では現在までに約5,500m²に及ぶ調査が実施されているものの、その大半は井戸、大小の溝、土塁であり、若江城周辺の集落跡として理解されている。その中で昭和54~56年にかけて行かれた調査で発見された大溝は、若江城の問題を考える上で貴重なものとなった。^{注2}

この大溝は東西方向に伸びる、幅7m以上、深さ2m以上の規模を持っている。また、16世紀前半頃に造られ、16世紀中頃から末にかけて人為的に埋められたもので、存続時期が長くとも50年の間に収まるものである。このため、若江城の濠と推定されている。

今回発見した大溝は第6層上面から掘られており、第6層上面の他の遺構としては土塁1~3、掘立柱建物がある。これらの遺構は16世紀前半から中頃に集中しており、大溝の開削時期もこの時期に近いと推定する事ができよう。溝状遺構・土塁4は、出土遺物から16世紀中頃と考えられ、大溝が埋められた後に造られたものである事から、大溝の上限は16世紀中頃と考えられる。

以上の点から、この大溝は濠と推定される大溝と同様に、若江城の濠の一部として考える事ができる。

注1. 藤井直正・下村晴文・勝田邦夫「若江寺跡・若江城跡」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報
15 1975。

2. 勝田邦夫・阿部嗣治「若江遺跡発掘調査報告Ⅰ」東大阪市遺跡保護調査会 1982。

図 版

図版1 半堂遺跡遺構



1. 墳丘基底部(南より)

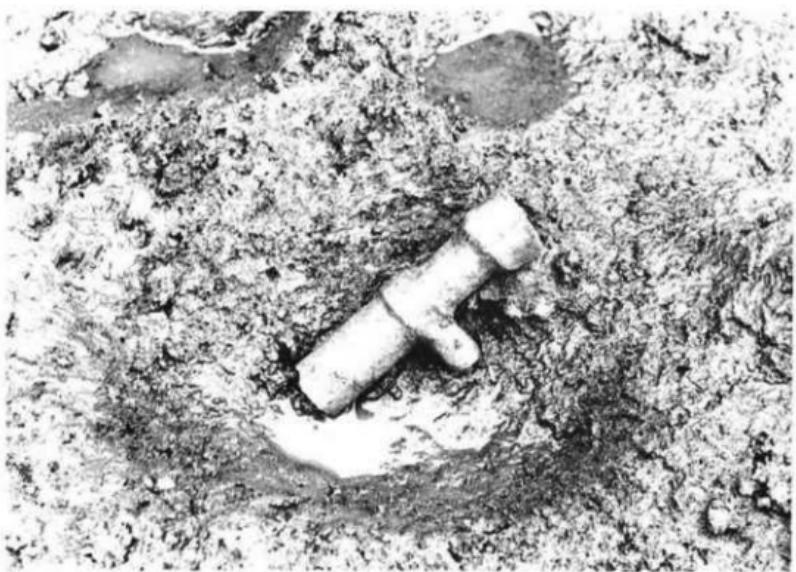


2. 墳丘基底部(南西より)

圖版2 半堂遺跡遺構



1. 遺物出土狀況



2. 遺物出土狀況



1. 遺物出土狀況

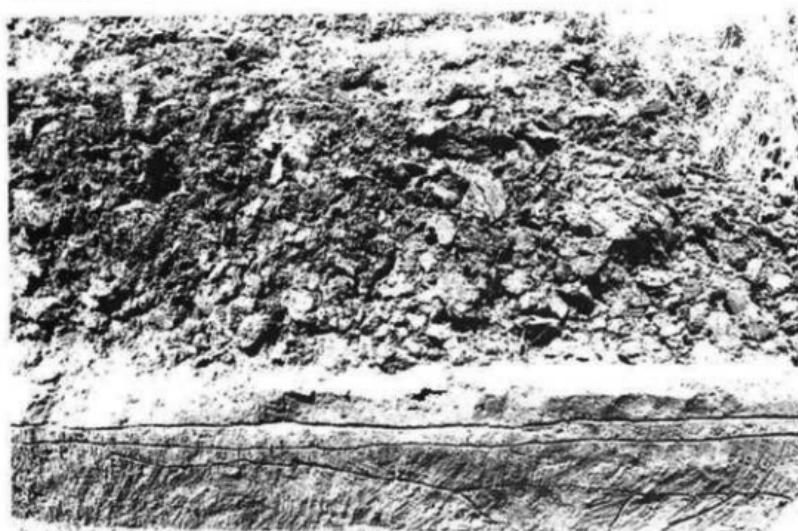


2. 遺物出土狀況

図版4 半堂遺跡遺構



1. 周濠部断面



2. 第1トレンチ周濠部断面







3'



3



4'



4



5'



5



2'

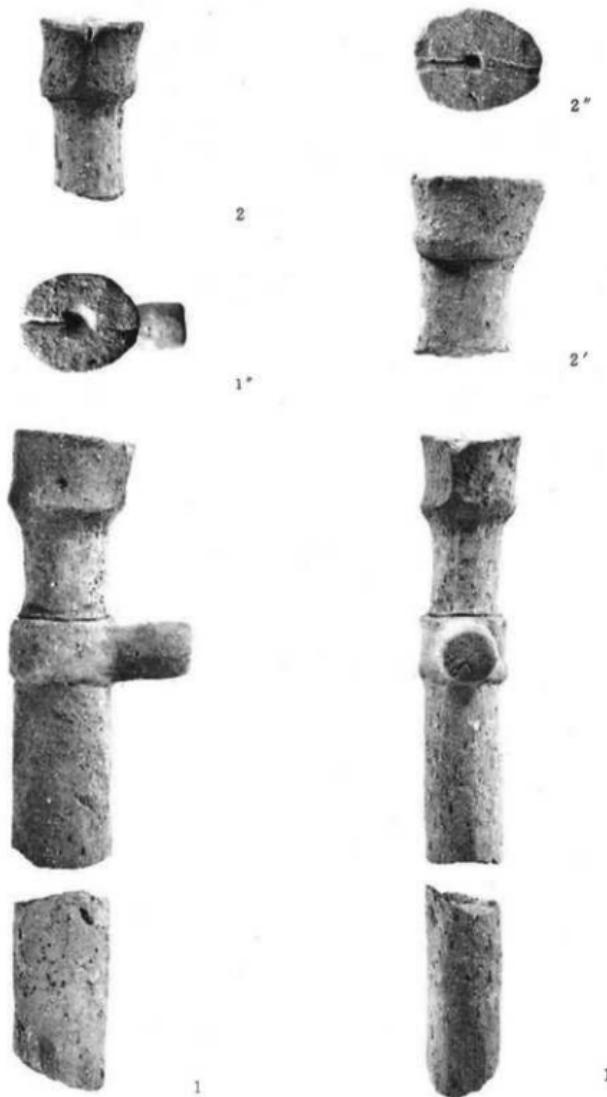


2

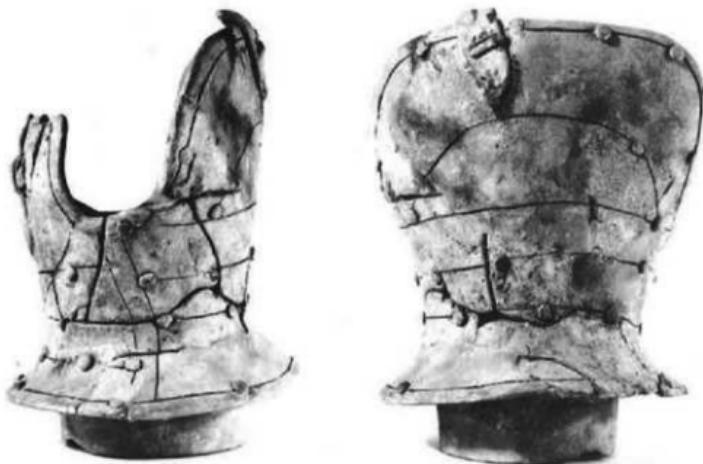
圖版9

半脊造像人物

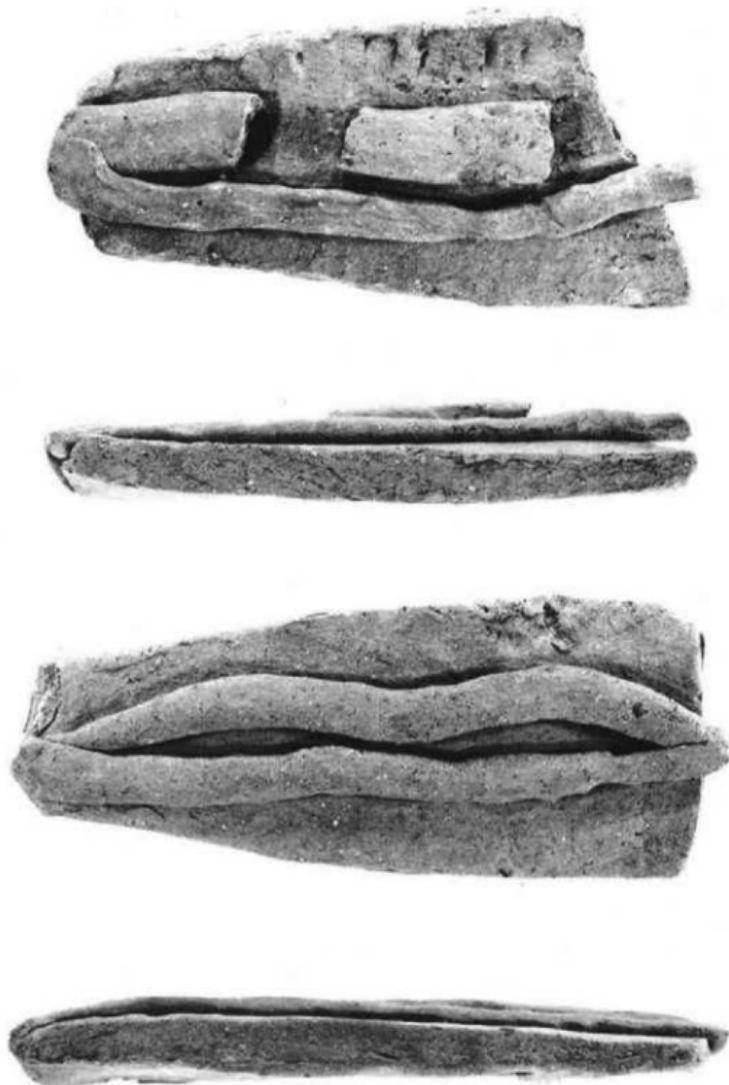


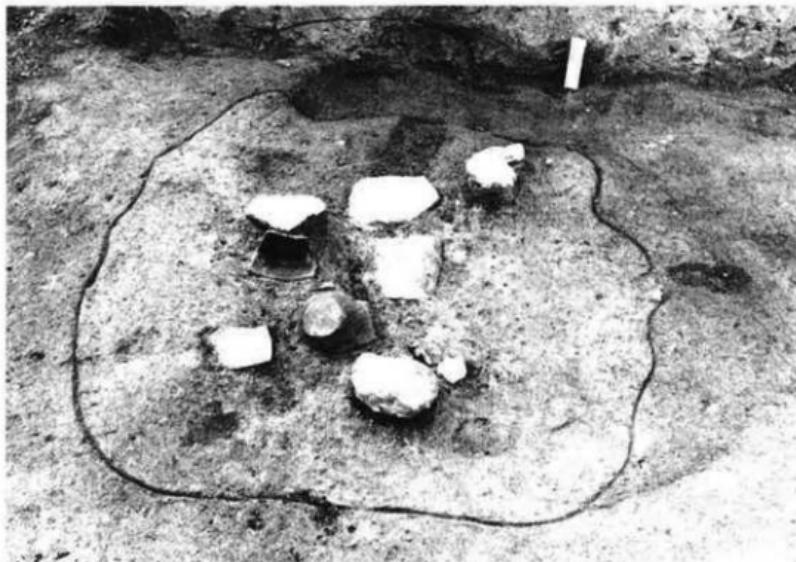


圖版 11
半堂遺跡短甲



圖版 12
半堂遺跡琴





1. 土塙 1



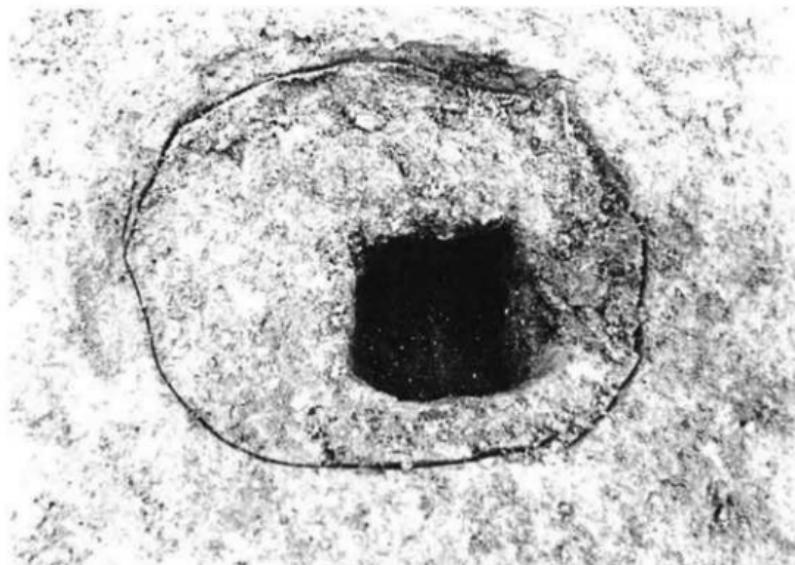
2. 土塙 3



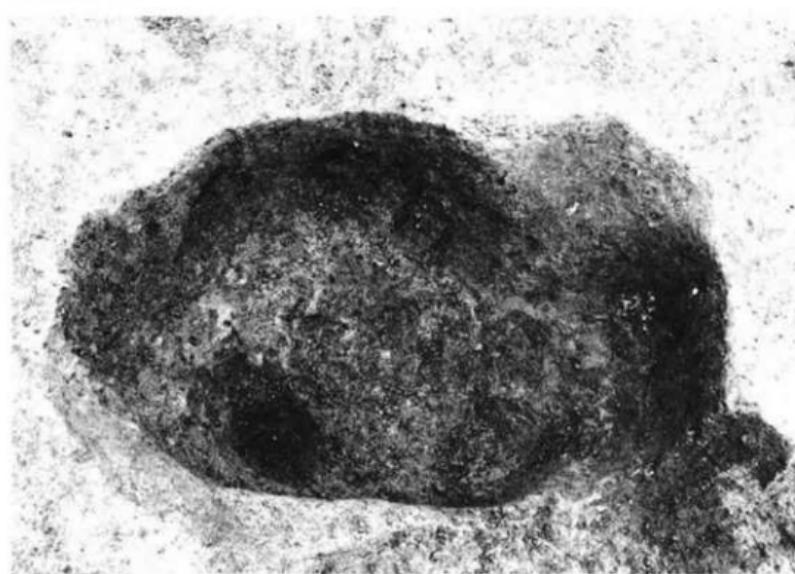
1. 土坡 2 上面鋪設燒鑿出土狀況



2. 土坡 2 內瓦質火舍出土狀況



1. 掘立柱建物柱穴



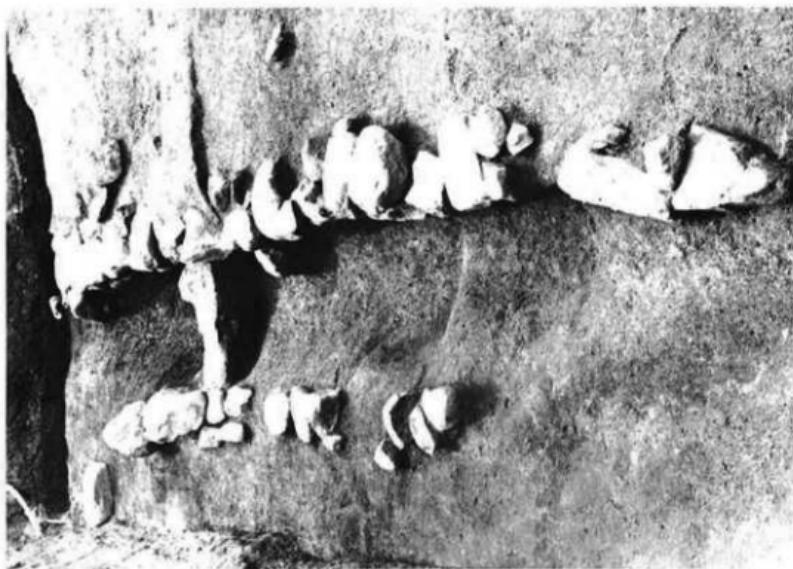
2. 土堆 4



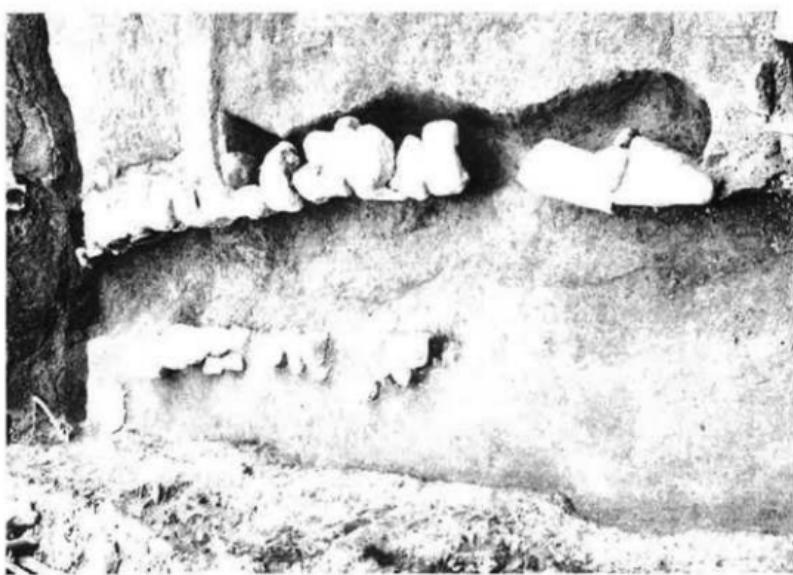
1. 大溝(南より)



2. 溝、土塚 4



1. 溝全景(北より)



2. 溝全景(北より)



1. 溝伏造橋西側石組み



2. 溝状造橋西側石組み



1. 溝状造構掘り方



2. 溝状造構掘り方

圖版 20
若江遺跡遺物



1



3



6



8



10



13



14



15



18



19



20



23



26



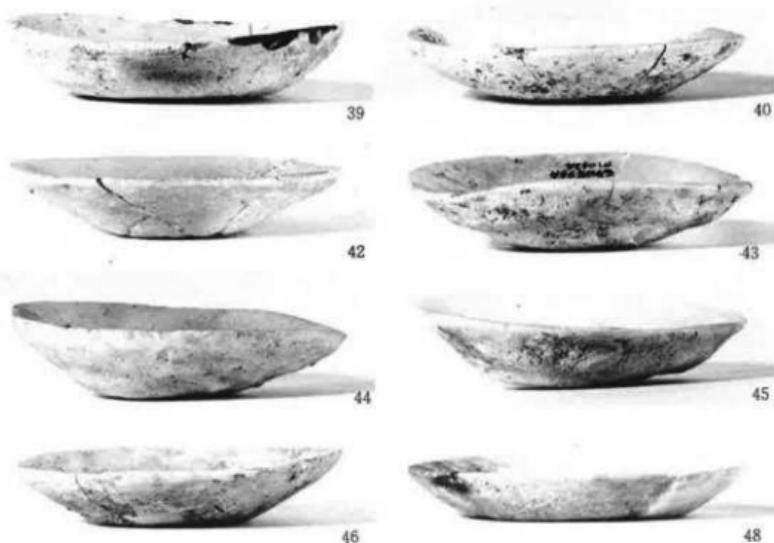
31



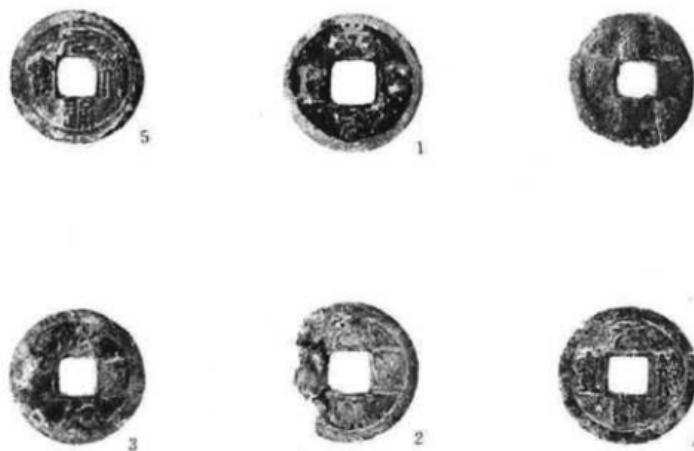
37



38



1. 土師器皿



2. 古錢



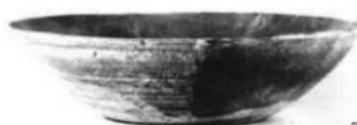
53



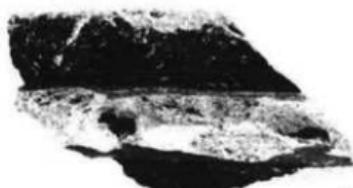
52



54



51



56



58



55'



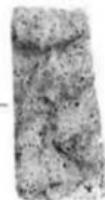
55



-



-



59



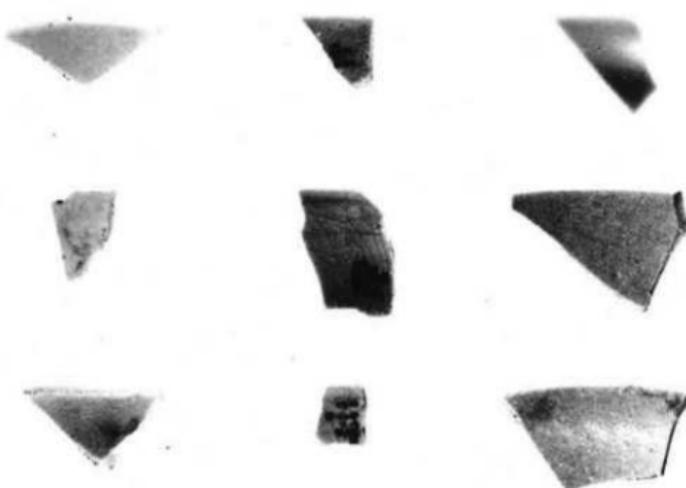
-



60

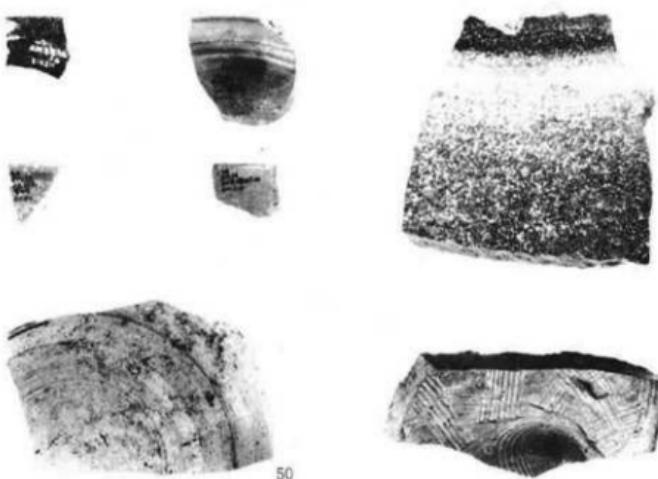
陶器(擂鉢、鉢)、磁器(碗)、石鍋、軒丸瓦、瓦質土器(火舍、桔鉢)

36



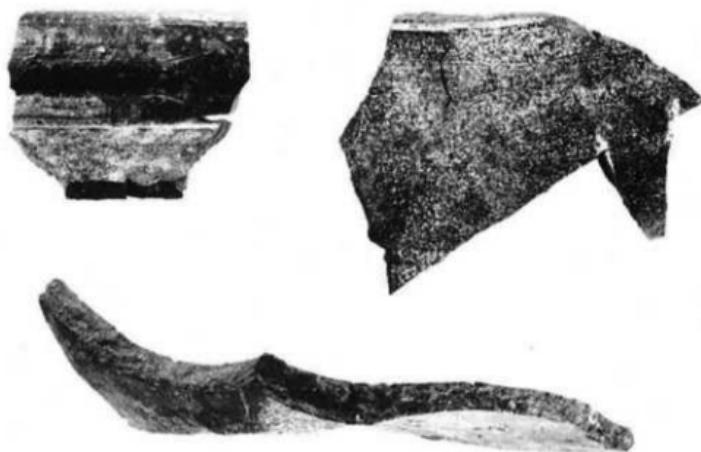
34

1. 磁器類(碗)



50

2. 陶器(擂鉢、鉢、壺)



57

1. 陶器(燒前燒變)

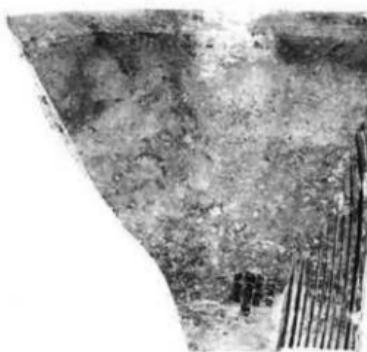


57

2. 陶器(燒前燒變底部)



33



49

1. 瓦、ミニチュア羽釜、瓦質擂鉢



2. 鬼瓦

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報23

半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報

発行日 1982年3月31日

発 行 東大阪市教育委員会

東大阪市荒川3-25 (〒577)

電話 06-728-5521㈹

印刷所 中島弘文堂印刷所